二、語・句の釈は、つとめて平易なることを目指したが、なるべく実例を多く附して会得しやすからんことをも念じた結果、時に甚だしく長きにわたったものもある。

一、語・句の釈において、疑問のものはその旨を注して、後考に譲った。

一、今、全体を通観し、分って十一の章を立てたが、章の名称及び段落の分け方と共に、全く便宜に従ったものである。

附　記

本書は、もと書肆の需めにより昭和二十七年八月繁忙の間短時日の中に、制作したものである。全編随処において未熟なものを公表せざるを得ぬ苦痛を味った。江湖の清鑑を経て、叱正を仰ぐことを得るならば幸ひであるが編者自身も亦研鑽して補訂したい心である。

なほ、本編の分担は、先づ、本文、註解、序、解説等の草稿を山田俊雄が作成し、次いで、註解の補足、索引の編纂及び全編成を山田忠雄が行った後、更に山田孝雄が全体にわたって校閲、助言を与へ整斉した。校正は山田忠雄、山田俊雄が担当したのであるが、責任の主として存する処右によって自ら明かであらう。

追　記

尠からざる誤植を、数年来本書を教材として使用し呉れた鈴木真喜男君（学芸大学助教授）の援助によって今般訂するを得た。同君の厚意に謝すること切。

昭和五十一年三月末日

目　次

序……三
凡例……五
一、なよ竹のかくや姫……一〇
二、かいまみ……一六
三、ゆかしき物みせ給へ……二二
四、天竺の佛の御鉢……二五
五、優曇華の花……二八
六、火鼠のかはごろも……四一
七、龍の頸の玉……四六
八、つばくらめの子安貝……五五
九、行幸……六二
十、羽衣……六九
十一、不死の薬のつぼ……八一
索引……八七
解説……九八
竹取物語の女主人公の名……一〇四
「なたねの大さ」の論……一一三

一、なよ竹のかくや姫

㊀今昔　㊁竹取翁と　㊂言者有ケリ　㊃野山にまじりて竹をとりつゝ萬の事につかひけり　名をば　㊄さるきのみやつことなんいひける　其たけの中に　もとひかるたけなん一すぢありけり　あやしがりて　寄て見るに　つゝの中ひかりたり　それをみれば　三寸ばかりなる人　いとうつくしうてゐたり　おきないふやう「我朝ごと夕ごとに　みるたけの中におはするにて知ぬ　子に成給ふべき人なめり」とて　手にうち入て　家へもちてきぬ

㊀いまはむかしたけとりの翁といふもの有けり――物語・説話の冒頭に屢々見られる句の形式の一つ。平中物語・落窪物語・今昔物語集・宇治拾遺物語等に例がある。又「昔、男ありけり（伊勢物語）、「むかし式部大輔左大辨かけて清原の王ありけり」「昔、藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましけり」（宇津保物語）、「昔故京時有二一男人一」（日本靈異記上十五）、「昔長者有キ」（三寶繪上）、「昔池の尾に善珍内供といふ僧住ける」（宇治拾遺）の形式や、「是も今は昔」「是も昔」（宇治拾遺）の如く前の説話を承ける形式も見られる。源氏物語の冒頭「いづれの御時にか」もこの流を汲む形式の一つであらうか。この「今は昔」に呼應して、末尾は「……とぞいひつたへたる」とあって、他にも「……となむ語り伝へたるとや」（今昔）「……とぞかたりつたへたる。（不思議の事也）」「……とかや」「……となん」「……とぞ」（以上宇治拾遺）等を以て結ぶことが多い。萬葉集卷第十六の有由縁歌の題詞や左注の形式、たとへば「昔者有娘子宇曰櫻兒也……」（三七八六）、「右伝云、昔者鄙人（姓名未詳也）……」（三八〇八）等を考へ併せると、普通に現存の昔話を語る形式として知られる、「とんと昔」「とんと昔もあったと」「とんと昔もあった相な」、「昔々」「昔々ある所に」「まあ昔」「昔」の形式と脈絡が有り、一般に、物語を話す仕方として存在するもので、外国文学におけるものとも軌を一にする。しかし「此ちかくの事なるべし、女ありけり」（宇治拾遺上末）「近比無沙汰の智了房といふもの有けり」（古今著聞集）などの形式は年代の明かなる話に対して、やゝ不明な場合におこった副次的のものであらうと考へられる。何となれば、今昔物語集及それ以後の「今は昔」は、極めて形式的で、「今は昔、本朝天智天皇の御代に云々」のごとく、「昔ある時」といふやうな漠とした過去を指す意味を実質的には失ひかけてゐるからである。したがって室町期のお伽草子などに「中昔の事にやありけん」といふ句の見られるのは、むしろ更にすゝんで時代的意識を明瞭にしたいひ方であって、「昔男ありけり」の説話的な作り話的な語り方から離れようとしてゐるのではないであらうか。即ち伝説・説話から乖離した源氏物語及それ以下の作品を意識に上せてゐる擬古的な態度である。同時に「中昔」「中頃」の如き時代区分の考へ方は、漠としてゐる様であるが必ずしもさうではない。

㊁たけとりの翁――萬葉集卷第十六（三七九一）詞書にいふ「昔有二老翁一號曰二竹取翁一也……」

㊂野山にまじりて――「まじる」は「中に入る」「中に身を置く」「他と同列にならぶ」の意。「世の中にまじる」などのいひ方もある。

* 古今集春下「いざけふは春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花のかげかは」
* 後撰集春上「春雨のふらば野山にまじりなむ梅の花がさありといふなり」
* 宇津保菊の宴「或は山林に交りて金の御嶽越の白山宇佐の宮まで參り給ひつゝ」
* 源氏、蜻蛉「女郎花乱るる野辺にまじる共露のあだ名を我にかけめや」（歌）
* 源氏、若菜上「……今とてかきこもり、さる遙けき山の雲霞にまじり給ひにし、空しき御跡にとまりて悲しび思ふ人々なむ多く侍る」
* 続千載集春上「押並べていざ春の野にまじりなむ若菜摘来る人も逢ふやと」
* 方丈記「世を遁れて山林にまじはるは心をゝさめて道を行はむとなり」
* 今昔物語卷十三、第二「永ク本寺ヲ出デヽ、山林ニ交テ佛道ヲ修行シテ」
* 今昔物語卷十四第十「夏ハ河ニ行テ魚ヲ捕リ、秋ハ山ニ交ハリテ鹿ヲ狩ル」